

2021年1月10日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 14章 8～14節

説教題：神を見せて下さい

ある牧師先生が若い頃、アメリカを旅行し、あるクリスチャン家庭に泊めてもらいました。夕方、その家の主人が彼に尋ねました。「お腹はすいていないか?」。先生は奥ゆかしく答えました。「いいえ、すいていません」。しばらくすると、その家の夕食が始まった気配がします。しかし、いつまで経っても、食事のお呼びがかかりません。結局、その日の夕食はなしだったそうです。その時、「アメリカでは、遠慮深さ、言外の心を汲み取ってくれるだろうなどという甘えは通用しないということを身に沁みて教えられた」ということでした。先生の本は「これは祈りにも通じることではないか」と言うニュアンスで書かれてあったように、私は受け取りました。「心だに、誠の道に、かなひなば、いのらずととも、神やまもらむ」という古い歌があるそうですが、「もちろん神様は、私達が「願う前から…必要なものをご存じ」(マタイ 6:8)の方ですが、しかし「人格者である神様に向かってきちんと祈る、きちんと祈って交わる」ということも大切なのではないのでしょうか。

クリスマスの期間を挟んで随分と間が空いてしまいましたが、14章 1～7節でイエス様は、不安と混乱の中にいる弟子達に「心を騒がせずに私を信じなさい」と言われました。弟子達は、イエスの言われたことが良く分かりません。7節では「今や、あなたがたは…すでに父を見たのです」と言われます。ユダヤ人にとって神は見えない方です。彼らはますます混乱します。そこでピリポが「主よ、私達に父を見せて下さい」と切り出します。それを契機に、今日のイエス様のメッセージがなされます。イエス様は、弟子達を励ますために語られますが、同時に私達にも、信仰生活への励ましを語って下さいます。2つのことを申し上げます。

1：主イエスを通して神に触れることが出来る

ピリポは「主よ、私達に父を見せて下さい」(8)と言います。ユダヤ人にとって神は見えない方でしたが、旧約聖書には神を見た人の話があります。モーセは、イスラエルの民を導くのに疲れて大混乱している時に、神様に「姿を見せて下さい」と頼みます。そして神の後ろ姿を見ることを許されました(出エジプト 33～34)。そうやって彼は、不安と混乱の中で、神との特別の交わりを通して神に従い行く確信を与えられたのです。この時、ピリポは、その特権に与って確信を得たかったのではないのでしょうか。イエス様は「神を見る事が出来ない」とは言われませんでした。そうではなくて「わたしを見た者は、父を見たのです」(9)と言われたのです。

日本には「鯛の頭も信心から」とか「狐の尻尾も信心から」という言葉があります。何でも良い、信じる事が尊いのだということでしょう。しかしキリスト教は、決して何か分からないものを信じて行く信仰ではありません。11節に「わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい」(11)とあるように、キリスト教は、イエスという歴史的な人物の生涯を通して、神がどういう方であるかを知ることが出来る、そういう信仰です。そのために私達には4つの福音書があります。不思議な神体験をすることも祝福ですが、それ以上に、神への信仰は聖書を通してイエスの生涯に触れ、イエスを通して神に触れることによって育て

られて行く、それがここでイエスが教えておられる信仰の在り方なのです。

では、イエス様を通して私達は神様の何を(どんな性質を)理解することが出来るのでしょうか。イエス様は「業によって信じなさい」(11)と言われました。イエス様がその為さった業を通して見せて下さったのは、神は力ある神であるということです。イエスは、様々な力ある業を為さいました。死んだラザロを甦えらせることさえなさいました。神は力の神です。しかし、それ以上にイエス様が教えて下さったのは、神様は愛の神であるということです。神様が愛の神でないなら、気に入らない人間はさっさと裁けば良いのです。多くの人がそのような裁く神を想像していました。しかし、イエス様は見せて下さいました。神様は裁く神ではなかった、愛の神でした。

私は「姦淫の女」の話にイエス様の愛、神の愛を見ます。イエス様の前に姦淫の現場を押さえられた女が連れて来られました。宗教指導者は言いました。「モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか」(5)。確かに律法は姦淫を死刑と定めていた。しかしイエス様は「そうだ、石で打て」とは言われなかったのです。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい」(7)と言われたのです。彼女を責め苛む指導者に対して「あなた方には、罪はないのか。あなた方は、神に代わって彼女を石打てるほどに立派なのか」。この言葉に力がありました。この言葉でイエス様は、女を守られたのです。そして言われました。「わたしもあなたを罪に定めない」(11)。これは「あなたの代わりに私が十字架にかかるのだ」ということです。さらに「今からは…罪を犯してはなりません」(11)、つまり「私の助けを受けて違う道を歩みなさい」と励まして下さったのです。

イエス様が見せて下さった神様は、愛の神でした。ある本にこんな言葉がありました。「自ら苦しみを負うことなしにひとり人間を生かすことはできない」。人を愛するということは、ある意味で、苦しみを負うことだと言えるのではないのでしょうか。家庭の中でも、そうでしょうか。そして、神が私達を愛する方であるから、神の子は、その生涯を通して人々の苦しみを担い、何より最後まで十字架の苦しみを偲ばれたのです。神様が私達を愛して下さったからです。

イエス様は、神がどういう方であるかを見せて下さいました。神は愛の神であること、今も私達を愛し、赦し、生かし、永遠の命にまで導いて下さる方であること、だからこそ「恐れるな。わたしはあなたとともにいる…わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ 41:10)という約束も信じることが出来ること、このことが私達の信仰生活を励まして行くのです。だからイエス様を学ぶのです。

2：祈りを通して神に触れることが出来る

イエス様は、さらに驚くようなことを言われました。「わたしを信じる者は、わたしのわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います」(12)。どういうことでしょうか。弟子達の行ったことで、イエスの為さったことよりも大きなこととは何でしょうか。それは恐らく「宣教の広がり」ではないでしょうか。イエス様は、パレスチナ以外では活動をされませんでした。そして、パレスチナにおいて、イエス様に敵対する多くの人々がいたとしても、彼らは、ある

意味で神を恐れる人々でした。その考え方や方法が間違っていたとしても、神に喜ばれることを意識していた人々です。しかしイエス様の後、初代教会は、宗教的徳の通用しない異教世界へ出て行き、宣教したのです。恐ろしいことに、その人々は円形(半円)闘技場(劇場)で奴隷に殺し合いをさせて、その刺激を楽しんでいた人々です。後には、キリスト教徒が猛獣に食われるのを楽しんで見ていた人々です。彼らは、そんな世界で「十字架で殺されたイエスは甦った、神の子だった、あなたもイエスの十字架を信じて救われなさい」という、「何をとぼけたことを…」と言われそうなことを言い続けて、やがて人々の心をつかみ、そして300年後、ローマ世界をキリスト教世界にしてしまったのです。

さて、しかし、大切なことは、彼らがそのような大きな働きが出来るようになる理由を、イエス様は「わたしが父のみもとに行くからです」(12)と言われました。どういうことかという、イエス様が神の御許に行き、彼らの祈りを執り成すから、神の力によってそのような大きなことをするというのではないのでしょうか。私は、祈りの大切さを教えられます。

戦前、中国大陸の熱河省というところで日本人宣教師が中国人に伝道をしたことがありました。「熱河宣教」と言われます。そのリーダーがこう言っています。「伝道の働きの中で、まず第一にすることは祈りです。後はつけたしです」。この言葉は、祈りの大切さ、祈りの力を教えてくれます。ソロモン王は、神殿を造った時、神殿を神様に捧げる祈りをしました。その祈りは「神の前に自分は小さい者に過ぎない」という小ささの自覚から始まります。ある本に、その祈りを解説して次のように書いてありました。「ソロモンの祈りから知ることは、罪の告白、自らの小ささの意識がはっきりしていることである。祈りとは、要するに自分の小ささ、無力の自覚から出て来るものである。祈れない、祈ろうとしないというのは、口先では謙遜を装っても、自らの小ささ、無力の自覚、罪の自覚に乏しいと言わざるを得ない。祈りを必要としないほど、立派なのである」。最後に「ちょっと皮肉ったらしいが」と、付け加えてありました。

私達が誰かのことを気に掛けながら、しかし、何の連絡もしないということがあります。その人のことを忘れていた訳ではない、いつもちゃんと心にはあるのです。しかし、そこに建設的な交流は始まらないと思うのです。時間をとって、「エイっ」と思って電話をして、自分の気持ちや伝え、相手の声を聞き、そのようにして初めて生きた交流が生まれて来るのではないのでしょうか。信仰生活でも、祈りがなければ、いくら聖書を読んでも、讃美をしても、メッセージを聞いても、それは「人間的なレベルで止まってしまう信仰生活」ということにならないのでしょうか。突き抜けられないのです。信仰生活に神様に入ってもらうために大切なのは、祈りです。信仰者の強さは、ただ神とつながっている強さです。頭を垂れて祈る、祈りが私達の信仰生活を支え、励ますのです。

そしてイエス様は、祈りについて「あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましよ」(13)と言われました。これは「イエス様の御名によってお祈りします。アーメン」と祈りの最後につけるということだけではありません。聖書では、「名」は、その人の全てを代表するものです。「イエス様の御名によって」というのは「神の子が人となって来られ、人に仕えられ、人を救うために十字架に架かれ、死から甦られたこと」、その「主の生涯を心に覚えて」ということです。ある人が「かつて私は『神様、あの人を殺して下さい』と祈って

いた」と証しました。イエス様の生涯に照らした時、その祈りを神が聞かれるはずがないのです。でも、私達がイエス様の生涯にフィットする祈りをする時、具体的には、「愛」「赦し」「神への服従」に生きるために祈りをする時、それは必ず聞かれるということです。だから「メッセージ訳聖書」は「私がどんな者であるか、私が何をしたか、そのことに沿った願いをするなら、私はそれをして上げよう」(13)と訳しています。

ある教会で1人の老婦人が天国に召されました。長い信仰生活の末の凱旋でした。この方は、牧師にこう話していました。「私は立派なクリスチャンではありませんでした。そんな私を見て、家族の誰もクリスチャンになろうとしませんでした。それが私の大きな悲しみです。でも、私は祈ることができます。朝に夕に、私は家族の救いを祈っています。『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます』のおことばを頼りに祈っています」。葬儀が終わったとき、その息子さん夫婦が牧師のところにやって来ました。「先生、お話しがあります」。「どうぞ」。「今日は、母の葬儀をありがとうございます。つきましては、私達夫婦は、本日から、母の信仰を受け継いでまいります。母が生きている間は、反発して信じようとはしませんでした。しかし、母が何十年も最も大切にしてきたキリストへの信仰を、私達が受け継ぐべきだと夫婦で決心したのです。そうさせたのは、母の祈りの姿です。母はいつも曲がった背中をさらに曲げて、よく祈っていました。私達子どものためにです」。御心に適う祈りを、イエス様は聞いて下さるのです。希望を持って祈りに励みましょう。

結論

ヤコブは言いました。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなた方に近づいて下さいます」(ヤコブ 4:8)。聖書と祈りを通して神を知り、神に近づき、神に捉えて頂き、信仰の喜びと力を味わわせて頂きましょう。